

令和 2 年 9 月 15 日現在

機関番号：64401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K03070

研究課題名(和文) 本州とその周辺の島々及び多島海海域における民俗芸能の研究

研究課題名(英文) Study of the folk performing arts in the islands sea area of Honshu and the neighboring Islands

研究代表者

笹原 亮二 (SASAHARA, Ryoji)

国立民族学博物館・学術資源研究開発センター・教授

研究者番号：90290923

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：全国各地には存在形態や規模が異なる多くの島々や多島海海域が存在する。本研究では、本州とその周辺に存在する伊勢志摩地方、佐渡島、伊豆諸島、陸前中・北部地方、隠岐諸島等の島々と多島海海域の民俗芸能や祭について、現地調査、文献調査、情報収集を行い、実態の把握を試みた。その結果、島々や海域の民俗芸能や祭は、それぞれの時代の政治権力や宗教的権威と関係が深いこと、太平洋側よりも日本海側のほうが多く分布し、それらの伝播や定着には、江戸時代に多くの人や物資が運ばれた西回り航路の影響が強いこと、災害に見舞われた地域コミュニティの再建に、民俗芸能や祭が一定の役割を果たしたこと等の特徴を明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、島々や多島海海域の民俗芸能や祭が現在直面する維持・存続の危機を、地域社会自体の維持・存続の危機と一体と捉え、現在の厳しい状況に至った経緯を各地の島々や海域の民俗芸能の実態を通して分析・検討することを目指している。従って、本研究によって得られた知見は、島々や海域に留まらず、同様の今日的課題を抱える全国各地の地域社会の維持・存続の危機の改善に向けて、一定の有効性を有することが期待される。

研究成果の概要(英文)：In Japan, many islands and the islands sea areas varying in an existence form and a scale exist. In this study, I gathered information of a field work and documents about folk performing arts and festivals of Islands and the islands sea area which existed in and around Honshu, such as Ise Shima district, Sadogashima island, Izu Islands, Miyagi Sanriku district, Oki Islands, and tried grasp of the actual situation. As a result, I was able to clarify the following characteristics. Folk performing arts and festivals of these areas were related with the political power of each time and religious authority deeply. They have more Sea of Japan side than the Pacific side, and the influence of the western sea route of the Edo era resisted the spread and the fixation of the folk performing arts and the festivals. They played a constant role in the rebuilding of the area community hit by a disaster.

研究分野：民俗学 民俗芸能研究

キーワード：島 民俗芸能 祭 獅子舞 神楽 闘牛

1. 研究開始当初の背景

(1) 柳田國男と島嶼研究

民俗学の島嶼世界への関心は古い。柳田國男は『海南小記』を著す等、早くから島に関心を寄せ、戦後も離島調査を実施し、『島の人生』『海上の道』等を著した。柳田の議論は、a.島を孤立させず、本州等の主島や他の島々との人・物・情報等の移動を介した歴史的・政治的・経済的・文化的な関係において理解する、b.日本の歴史や文化を主島側ではなく島々の側から見る視点の転換を行う、c.島の後進性を島外との関係で歴史的に形成された問題と認識し、解決を研究の重要な目的とした等の特徴がみられる。そうした関心は、沖縄を通じて「まれびと」「常世」等の神観念や他界観を見出した折口信夫、国内外で島嶼や多島海的な海域の調査を組織的に進めた渋沢敬三とアチック・ミュージアム、島嶼の現地調査を通じて離島振興に積極的に関与した宮本常一等に受け継がれていった。

(2) 民俗学における島嶼研究の展開

その後民俗学では、島の民俗の古態の研究、コスモロジー的研究、風土論的研究等が現れ、島が地域類型の1つとされるに至った。こうした研究は、近年の環境民俗学、生態民俗学、地域振興や観光に関する島嶼研究へと繋がった。それらの研究は、島を総体的に論じることで、離島の孤立性や境界性の過度の強調、相互に関連する島の民俗の要素への分解等の従来の研究への批判として一定の意義を有するが、島外との関係への配慮の点では必ずしも十分ではない。また、個々の島の民俗誌的研究の蓄積も多いが、研究が島内に終始しがちの感は否めない。

本研究は、そうした従来の民俗学の研究を承けて、島外との関係を重視した柳田の視点の有効性に改めて注目し、各地の島嶼や多島海的な海域の民俗芸能や祭の実態の解明を試みるもので、従来の民俗学の島嶼研究と一線を画すと同時にそれらを補完するものである。

(3) 島嶼の民俗芸能の調査研究の緊急性

島嶼の民俗芸能は、近年の過疎化・少子高齢化等で上演や伝承が危機的状況にあるに留まらず、それを伝承してきた地域社会自体の維持や存続が危ぶまれる状況にある。従って、島嶼や多島海的な海域の民俗芸能の調査研究は、本州等の主島側にも増して一刻を争う緊急性が認められる。

(4) 地域社会の復興・振興と民俗文化の役割を巡る研究としての今日性

各地には、噴火や津波等の被害から復興を果たした島も存在する。それらを含めて島嶼の民俗芸能や祭を対象とする本研究は、全国各地の被災からの復興や振興に民俗芸能や祭が果たす役割に注目する、近年の地域研究と軌を一にする。

2. 研究の目的

本州とその周辺には、隠岐諸島・佐渡島・伊豆諸島・伊勢志摩地方・陸前中・北部地方等、形態や規模の異なる島々や多島海的な海域が存在する。それらの地域では、航路上を往来する人・モノ・情報を通じた島外との交流・交渉で培われた開放性、四囲が海で外部と隔絶し易いことで醸成された自律性、漁民や海民の活動圏や旧藩等の支配に基づく領域性と、海民が活動した伊勢志摩地方、無宿人や罪人が配流された佐渡島や隠岐諸島、航路の開発が西日本や日本海側より遅れた陸前中・北部地方、噴火に度々見舞われた伊豆諸島等、それぞれの地域特有の地域性が交錯する中で独自の地域社会が形成されていった。

こうした本州とその周辺の島々や多島海的な海域には、佐渡島の鬼太鼓、陸前中・北部沿岸の法印神楽等、それぞれの地域独特の民俗芸能が存在する一方で、盆踊や獅子舞等、特定の地域を越えて広範に分布する民俗芸能も存在する。こうした民俗芸能の分布の様相は、開放性・自律性・領域性と地域性の交錯の中で形成されてきた各地の地域社会や人々の生活のありようと密接に関わっている。本研究ではこうした認識に基づき、本州とその周辺の島々と多島海的な海域における民俗芸能と祭について調査し、相互に比較を行って、その実態を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は、本州とその周辺の島々や多島海的な海域に伝わる民俗芸能や祭について、上演の様相等に関する現地調査、論文や調査報告書等に関する資料調査、本研究に関連する知見を有する研究者等からの情報収集を主たる方法として実施した。

4. 研究成果

(1) 伊勢志摩地方

正月の行事としては、伊勢地方では獅子頭を御神体として崇めて御頭と呼び、神社や集落内を巡って獅子舞を行う御頭神事が各地で行われる。御頭神事は1年交代で氏神を祀るトウヤ(頭屋)の行事として行わ

れる。志摩地方でも獅子舞の神事が行われるが、御頭神事とは呼ばれず分布も限られる。一方、志摩地方ほぼ全域で行われる正月行事は弓引神事で、儀礼的に魚を料理する盤の魚や獅子舞等と併せて行われたりトウヤの行事として行われたりする所も多い。弓引神事は同地方の島嶼部でもみられる。

盆の行事では、盆踊が伊勢志摩地方全域でみられる。伊勢地方では一般的な民謡で踊るが、志摩地方では各地に伝わる音頭で踊り、踊り手が仮装するところもある。伊勢地方の宮川流域では踊り手が腹部の太鼓を打って踊るカンコ踊が行われるが、同様の踊は志摩地方では僅かに分布するのみである。鉦や太鼓や念仏で新仏を供養する大念仏は、伊勢地方の宮川河口域から志摩地方にかけて分布する。伊勢地方では手に持った太鼓を打つ大念仏カンコ踊が行われるのに対し、志摩地方の大念仏では傘の内側に新仏の遺品等を吊り下げたカサブク(傘鉦)が出る。カサブクは島嶼部ではみられない。

天王祭は、伊勢地方では山車や河崎踊がみられるが、志摩地方ではかつて芝居が盛んに行われ、各地に常設舞台が建てられた。芝居は同地方の島嶼部でも盛んに行われた。浅間祭も伊勢志摩両地方でみられるが、志摩地方では大型の幣を立てて巡行したり浅間踊を踊ったりして盛大に催すところもある。

この地方ではその他、神楽・会式踊・万歳・盆の火祭等が行われるが、何れも分布は限られる。

伊勢志摩地方では、各地で獅子舞が行われたり、芸能や祭がトウヤの制度と結び付いたりといった共通点もあるものの、両地方の違いが目立つ。伊勢地方に分布する御頭神事やカンコ踊、志摩地方に分布する弓引神事や大念仏のカサブクや天王祭の芝居というように、芸能や祭の分布は両地方で異なる。志摩地方では弓引神事や浅間祭が漁民の豊漁・海上安全祈願で行われるなど、祭や芸能が海と関わりが強い点も伊勢地方と異なる。芸能や祭の面からみると、両地方は異なる地域といえそうである。

(2) 佐渡島

鬼太鼓は島内 100 カ所以上で演じられ、大佐渡・小佐渡の山脈の間の国中地方に分布が集中し、鬼が踊りながら太鼓を打つ国中系、本州側沿岸の前浜地方から南部に分布し、2 匹の鬼に道化役が加わる前浜系、外海府地方から相川・真野湾沿岸に分布し、豆蒔きの翁と鬼が出る相川系に大別される。大獅子は大勢の演者が胴幕に入って演じ、真野湾沿岸から前浜地方に分布する。性的な戯けた所作を演じるツプロサシは南部に数カ所分布する。3 匹一組のシシ(獅子・鹿)が太鼓を打ちながら踊る小獅子舞は北部沿岸と前浜地方の 8 カ所に分布し、そのうち 3 カ所は花笠踊とともに演じられる。水田耕作を模範的に演じる田遊びは山間部の 7 カ所ほどで行われる。流鏝馬は各地の八幡神社や古社の祭で行われる。子供が能風の囃子を演奏する下り羽も同様の神社の祭で演じられる。巫女舞等の神楽は各地の神社の祭で神職らによって演じられる。

島内にはその他、能・鷲流狂言・人形芝居・チョボクリ・春駒・盆踊等の様々な芸能が各地に伝来する。能は、江戸時代初期に大久保長安が能役者を連れて佐渡奉行として赴任して以降、島内各地に広まった。島内に能舞台が 30 棟以上現存し、祭の際に能が演じられてきた。人形芝居も江戸時代に伝わり、説教節で演じる人形芝居の間狂言としてのろま人形が演じられてきた。文弥節で演じる人形芝居は明治時代以降に演じられるようになった。明治時代には歌舞伎も伝わったが、昭和初期にはほとんど姿を消した。

流鏝馬や田遊びは中世の大社の神領や守護代・地頭の支配の関係で島外から伝わったとされるが、それ以外の多くの芸能はほとんどが江戸時代以降の伝来である。江戸時代には天領となり、金銀山の鉱夫が流入したり、多くの港が開かれて西回り航路の寄港地として賑わったりして、江戸や上方から人々や物資とともに様々な文化や芸能が島に伝わった。島内には京都からの伝来を伝える芸能が各地にみられるが、島の人々が航路を介して上方を身近に感じていたことの現れといえる。

(3) 伊豆諸島

伊豆諸島では、三宅島の御笏神社や御祭神社の神事舞、新島や利島や神津島の神楽、大島の大宮神社の里神楽等の神事芸能、新島の獅子木遣りや三宅島の獅子舞、大島の吉谷神社や岡田八幡神社の正月祭の奉納踊、八丈島の八丈太鼓や三宅島の木遣り太鼓等の太鼓芸、新島の大踊や八丈島の手踊・場踊といった各島の様々な歌や踊等がみられる。

伊豆諸島の芸能には複雑な構成や規模の大きなものは少なく、全体的には江戸時代に島外から伝わったものが多くを占めるが、それ以前の伝来とされるものもある。神事舞や神楽等の神事芸能は簡素な構成の採物舞や仮面の舞で、中世以前に伝来し、神事として神職らによって演じられてきた。三宅島には東遊歌や大神楽・小神楽等の古い神事歌謡が伝わり、一部は現在も祭の際に歌われている。

各島に伝わる踊は、流人や漂着者らによって伝えられた全国各地の歌や踊が基になったものが少なくないが、盆踊を初め、神社での信心踊、寺での手向踊や参詣踊等として、様々な機会に踊られてきた。伝来への流人の関与の伝承はこうした踊に限らない。三宅島の獅子舞も江戸からの流人が伝えたと言われ、新島

の獅子木遣りも江戸から流された火消しの頭が伝えたとされる。一方、最も本州に近い大島では、大宮神社の里神楽のように、流人ではない人々の伝来への関与を伝える芸能ものもある。この地域の島々への芸能の島外からの伝来の経緯は一樣ではなかったことが窺える。

(4) 陸前中・北部地方

法印神楽は浜神楽とも呼ばれ、宮城県の北部沿岸地域と北上川流域の石巻市・南三陸町・女川町の20カ所ほどに分布する。江戸時代は法印(修験者)達が演じたが、明治時代以降は法印の流れを汲む人々や彼らから習った一般の人々が演じるようになり、各地の神社の祭等で演じられてきた。各地の法印神楽は記紀神話を仮面の舞で演じるが、雄勝法印神楽は湯立や曲芸的な演技を行うのに対し、本吉法印神楽は曲芸的な演技や湯立は行わない等、法印神楽の地域毎の違いもみられる。江島法印神楽は大正8年(1919)に江島の人々が本州側から習って始まった。何れの地域の法印神楽も恵比寿の鯛釣りを演じ、この地域の漁民と法印神楽の関係の深さを示している。かつて沿岸各地では演者達が船で乗り込むこともあった。

石巻市田代島から牡鹿半島・気仙沼市唐桑までの各地では、年頭や神社の祭等の際に家々を巡って被い浄めを行う獅子舞が、各集落の契約講(会)や実業団の人々によって行われる。獅子舞は、女川町域では獅子振り、石巻市域では春祈祷・獅子風流と呼ばれたり、扁平で耳が立った黒い頭や赤い立体的な頭等、獅子頭の形が違ったり、獅子がアンバサンという神様の使いとされたり、大般若経と一緒に家々を巡ったり、道化万歳とともに演じられたり、地域毎の様々な差異が認められる。獅子振りは19世紀半ばの記録にみられ、当時既に行われていたことがわかる。

東日本大震災の被災地では獅子舞は一旦途絶えたが、上演を再開したところも少なくない。被災地における上演では、被災を機に地域外に移住した人々等、地域の居住者以外の参加もみられる。

この地方では他に、オメツキ(俄芝居)・大黒舞・虎舞や、気仙沼方面の南部神楽・田植踊・八つ鹿踊等がみられる。

(5) 隠岐諸島

神楽は江戸時代には豊作・豊漁・病気平癒等の祈祷として神社の社家によって演じられたが、明治時代以降は島後の村上家を除き、一般の人々が演じるようになった。島後の隠岐国分寺の蓮華会舞では竜王・太平楽等の舞楽由来の演目の他、麦焼舞等の独自の演目が演じられる。島前の美田八幡神社と日吉神社では、田楽踊・獅子舞等から構成される田楽が行われている。島後では玉若酢神社御霊会風流・水若酢神社祭礼風流・武良祭風流といった複数の集落が奉仕する大規模な祭が行われ、御田植・流鎗馬・獅子舞・神相撲等の芸能が行われる。隠岐諸島ではその他、盆踊・道中神楽・ダンジリ・地芝居・皆一踊等の芸能が伝わっている。

島前の田楽や島後の蓮華会舞や大規模な祭は、中世やそれ以前に本州側の権力者や大社寺による政治的・宗教的な支配を通じて伝わり、それ以降、島内の政治的・宗教的な権威・権力や人々の生活と結び付くことで、現在まで演じ続けられてきた。神楽もかつては社家が松江藩の支配下にあり、藩の役人の渡島の安全祈願を行う等、藩権力と深く関わる政治的な存在であった。他にも、罪人の配流や西回り航路等を通じた島外からの文化や芸能の伝来や、本州側の同系統の芸能との交渉交流等、それぞれの時代の島外との様々な関係が、この地方の芸能や祭の分布に影響を与えたことが窺える。

(6) 能登島

能登島の各地では秋祭に神社や神輿を招いた家々で獅子舞が演じられる。獅子は5人で演じ、獅子あやしが付く。獅子舞は豊年踊(三番叟)や俄踊とともに行われる。演者は踊り子と呼ばれ、俄踊の踊り子と獅子あやしは仮面を着け、かつては若者組のアンカ(長男)が勤めた。俄踊には団七踊・馬踊・猫踊等の演目があり、仇討ち等の内容が仕組まれる。馬踊は平敦盛と熊谷直実の一騎打ち、猫踊は里見八犬伝の化猫退治を仕組んでいる。俄踊は江戸時代末に島内向田の伊夜比咩神社の神主が考案して広まった。能登島の獅子舞は、頭の形や演者の人数等は対岸の能登半島と共通するが、俄踊は能登島から伝来したところを除けば能登半島ではみられない。能登半島では獅子頭とカヤを切り離す獅子殺しを行うが、能登島では行わない。

かつて島の西部の祭では杵旗が出ていたが、昭和初期に電線の敷設で出せなくなり、獅子舞を行うようになったとされるが、島の西部では現在も杵旗のみの祭や杵旗と獅子舞を並行して行う祭もある。それらの地域以外の祭でも過去に杵旗が出ていた時期もあり、かつては杵旗祭が島内全域で行われ、対岸の能登半島の大規模な杵旗祭が行われる地域と元々同じ1つの文化圏を構成していたとも考えられる。能登半島各地でみられる奉燈(キリコ)祭は能登島では向田以外にはみられず、能登半島各地に分布するアマメハギ等の正月行事は能登島ではみられない。能登島ではその他、盆踊・田植歌等も伝わっている。

(7) 闘牛

各地の島々では闘牛が行われている。隠岐諸島島後の牛突きでは、勝負を付ける本場所が檀鏡神社や一夜嶽神社の祭で行われる。取組では地元の座元とそれ以外の寄方の牛が闘う。牛主達が甚句等を歌って牛を土俵に連れ出し、勢子の綱取りが1人で引き綱(鼻綱)を持って闘わせる。女性は土俵に入れない等の禁忌があった。かつて島内では、牧畑の放牧や役牛で牛が多く飼われていて、各地で牛突きが盛んであった。

徳之島の闘牛はナクサミ(慰み)と呼ばれ、全島大会を初め年に十数回の大会が行われていて、闘牛の牛は全島で300頭以上とされる。かつては飼い牛を祭や年中行事の際に浜辺や河原で闘わせた。取組では牛をチヂン(太鼓)とラッパとワイドワイドの掛け声で囃す。勢子は1頭に1人で勝負が付くまで交代で勤め、最初は鼻綱を付けて闘わせ、頃合いをみて鼻綱を鎌で切って外す。

沖縄の闘牛は牛オーラセーと呼ばれ、全島大会を初め年に十数回の大会が行われていて、闘牛の牛は全島で2~300頭とされる。かつて年中行事や農閑期等に飼い牛によって各地のウシナー(牛庭)で盛んに行われた。牛1頭に1人の闘牛士が付き、勝負が付くまで交代で勤める。鼻綱を付けて闘い始め、頃合いをみて鼻綱を外す。沖縄島中部が盛んで、石垣島や与那国島でも行われている。

闘牛は島嶼以外でも行われている。宇和島の闘牛は突合いと呼ばれ、現在年5回の大会が行われる。かつては和霊大祭場所等の大きな大会では大勢の見物で賑わった他、各地の突き合い馬場では地元の飼い牛の突合いが盛んに行われ、大正から昭和初期には最盛期を迎えた。宇和島では、取組の際は独特の調子の牛の呼び込みがある。勢子は1頭に1人を交代で務め、牛は初めから鼻綱なしで勝負が付くまで闘う。

新潟県山古志・栗山では闘牛は角付きと呼ばれ、かつては勢子を牛持ち(牛主)の集落の若者が勤めたので、取組が集落対抗となって、勝負を巡って争いが生じることもあった。取組前に牛持ち達が土俵で手を打つが、かつて当日その場で取組を決めた頃の名残である。牛は赤牛(南部牛)で、ハナギ(鼻綱)を外して牛が闘い出すと、勢子はヨシターと掛け声を掛ける。1頭に大勢の勢子が付き、勝負が付く前に牛を引き離す。

岩手県久慈市山形町は南部牛の産地で、塩を運ぶ牛の行列の先頭を決めるために牛を闘わせたのが闘牛の始まりとされる。現在年3回の大会が行われ、勝負は付けない。

各地の闘牛は何れも江戸時代には既に行われ、何れの地域も牛を闘わせる点は共通するが、呼称・勢子・牛の操り方等、様々な点で異なる。古くからの他の地域との交流交渉があまり聞かれないことや、牛の行き来が盛んな沖縄と徳之島でも呼称や闘牛場の作り等の差異があること等を考えると、それぞれの地域の間に系譜等の関係はないように思われる。闘牛を黒潮圏の習俗とする見解もあるが、検討の余地がある。

4. 各地の島々や多島海海域の異同

今回の研究で対象となった各地の島々や多島海海域の間では、民俗芸能や祭の内容や分布等に様々な違いがみられた。しかし、総ての点で異なるわけではない。例えば、各地の島では芸能や祭の島外からの伝来への流人の関与が伝わっていた。こうした伝承は、文化的な洗練度が高い島外からの来訪者を文化英雄視する傾向が、各地の島の人々に共通して存在したことによとも考えられる。隠岐諸島や佐渡島の中世以前の伝来とされる民俗芸能や祭が比較的大規模であったことは、いずれもその時代の島外の強力な政治的・宗教的権威との歴史的な関係で芸能や祭が伝来し、受容されたことによると思われる。

また、同一地域内に多数分布する同系統の民俗芸能でも、演目や上演のやり方が異なる等、各地の民俗芸能毎に様々な差異がみられた。こうした差異は、それらがそれぞれの地域に伝わり、地域の人々に受容され、演じ続けられた結果、人々の生活の一部となっていることを示している。こうした芸能の民俗化は、島外との隔絶が生じ易く自律性が醸成されがちな島という環境によって、一層促進された可能性がある。

今回の研究対象の島々や多島海海域の民俗芸能や祭の様相は、瀬戸内海や九州周辺等の他の島々や多島海海域とも差異が認められる。こうした差異も、それぞれの島々や海域と外部の地域との歴史的な関係の差異に起因すると考えられる。そこで注目されるのは西回り航路の開発である。民俗芸能や祭の分布が太平洋側や九州周辺よりも日本海側が優越していることや、日本海側の島々の民俗芸能や祭に上方から伝来したとする伝承がしばしばみられたことも、西回り航路の存在と無関係ではないように思われる。

東日本大震災によって上演や伝承が中断した民俗芸能や祭の再開は、上演の際に、地域外に移住した旧住民や復興活動を通じて地域と関わるようになった人々が参加することで可能になった場合が少なくない。こうした民俗芸能や祭のあり方は、現在の住民や旧住民に加えて復興関係者という住民以外の新たな人々の参加を促すことで、地域コミュニティの再建や活性化、新たな形の地域コミュニティの形成の可能性を示している。また、定期的な噴火被害を想定して暮らす伊豆諸島の人々の芸能や祭の伝承や実践の検討を通じて得られる知見も、大規模災害後の地域コミュニティの再建という今日的課題を考える際に大いに参考になると思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 笹原亮二	4. 巻 20
2. 論文標題 島と芸能 - 西日本の島々と多島海的海域の芸能の諸相 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 島根県古代文化センター研究論集第20集 隠岐の祭礼と芸能に関する研究	6. 最初と最後の頁 21-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笹原亮二	4. 巻 25
2. 論文標題 だんじりの諸相 - そのルーツと広がり -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 島根の古代文化	6. 最初と最後の頁 124-143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笹原亮二	4. 巻 41-7
2. 論文標題 「琉球人」を演じる人々	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 月刊みんぱく	6. 最初と最後の頁 7-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笹原亮二	4. 巻 40
2. 論文標題 見世物と人々	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 月刊みんぱく	6. 最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笹原亮二	4. 巻 平成27年度
2. 論文標題 日本の島嶼文化の多様性と民俗芸能	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 「現代グローバル社会における自律的島嶼モデルの構築と実践 - 島嶼地域研究・教育の拠点形成 - 」報告書	6. 最初と最後の頁 247-255
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計5件

1. 著者名 錦織稔之・藤原時造・岩崎ことい・品川知彦・笹原亮二・山路興造・倉恒康一・山崎亮	4. 発行年 2018年
2. 出版社 島根県立古代出雲歴史博物館	5. 総ページ数 143
3. 書名 隠岐の祭と芸能	

1. 著者名 笹原亮二・永井猛・渡邊仁美・田畝智志・喜多村理子・三宅博士・靄理恵子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 島根県教育委員会事務局文化財課	5. 総ページ数 504
3. 書名 「因幡の麒麟獅子舞」調査報告書	

1. 著者名 笹原亮二・鶴飼正樹・川添裕・野林厚志・松尾恒一・山中由里子	4. 発行年 2016年
2. 出版社 国立民族学博物館	5. 総ページ数 211
3. 書名 見世物大博覧会	

1. 著者名 国立民族学博物館(監修 笹原亮二)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 国立民族学博物館	5. 総ページ数 151m
3. 書名 みんなく映像民俗誌第27集 民俗芸能と軽業	

1. 著者名 鳥根県古代文化センター(監修 笹原亮二)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 鳥根県古代文化センター	5. 総ページ数 35m
3. 書名 三谷神社の獅子舞	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>科学研究費助成事業による研究プロジェクト(2017年度) http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/project/other/kaken 科学研究費助成事業による研究プロジェクト(2016年度) http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/project/other/kaken 科学研究費助成事業による研究プロジェクト(2015年度) http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/project/other/kaken</p>
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考